

交流授業

—ドイツ語とロシア語—

Ein Versuch

—ein gemeinsamer Unterricht—Deutsch und Russisch

北岡 千夏
Chinatsu Kitaoka
西村 千恵子
Chieko Nishimura

„Wozu lernen wir auch noch eine zweite Fremdsprache, obwohl wir in Zukunft wahrscheinlich keine Gelegenheit haben, sie zu sprechen?“ wird oft von Studierenden in Japan gefragt. Alle Lehrende sollten dafür verantwortlich sein, diese Frage ernst zu nehmen, denn sonst würde sich die Atmosphäre in der Klasse immer mehr durch unmotiviertes Lernen verschlechtern und die Zahl der unaufmerksamen Studierenden zunehmen. Außerdem passiert es immer häufiger, dass die zweite Fremdsprache an japanischen Universitäten nicht mehr verlangt wird. In dieser Situation sollten alle Fremdsprachenlehrende auf die Frage „Wozu lernen wir das?“ die für jeden einzelnen Lerner eine plausible Antwort finden.

Wir wollen hier einen Versuch vorstellen, in dem wir eine Antwort darauf suchten. Dabei wurde keine Umfrage gemacht, was die Studierenden eigentlich lernen oder machen wollen, sondern wir führten ein Experiment in einem gemeinsamen Unterricht (joint lesson) der russischen und der deutschen Sprachgruppe durch. In der Klasse unterrichtete man aber nicht die beiden Sprachen, sondern die Studierenden tauschten ihre Kenntnisse und Erfahrungen aus, z.B. was sie bisher gelernt und verstanden hatten. Dabei konnten die Studierenden feststellen, was die jeweilige Sprache bedeutet und was sie mit der Sprache lernten. Unsere Absicht war, dass die Studierenden selbst Antworten finden sollten, wozu sie lernen.

1. はじめに

大学での英語以外の外国語学習では、「何のために学ぶのか」という学生たちの問いかけに対する答えを教師がそれぞれにもたねば、「使わない言語を学んでも仕方がないじゃないか」という理由からくる学習への消極的な取り組みが教室の中に広まりかねない。また、大学のカリキュラムから英語以外の外国語教育が消えて行く現実もある。この現実の中で多くの外国語を専

門とする教師が、「何のために」に対する説得力のある答えを探しているのではないだろうか。先ごろ京都大学学術出版会から出版された『マルチ言語宣言 なぜ英語以外の外国語を学ぶのか』などはまさにその証であろう。

我々はその答えを求め、よく行われるアンケートといったような形ではなく、ドイツ語とロシア語で交流授業をするという形で学生たちに問うてみた。本稿はその授業についての報告である。

2. 交流授業の実践

授業はドイツ語の学生はロシア語の学生に、ロシア語の学生はドイツ語の学生に、それぞれ3年間学んできたことを紹介するという、いたって簡単な形で進められた。

2-1. ドイツ語の学生の発表

「これから、ドイツ語チームの発表をします。私たちは4つのプログラムを用意しまして、ドイツ、あるいはドイツ語について皆さんに紹介しようと思います。初めにドイツという国についての紹介、次にドイツについての〇×クイズ、3つ目はドイツのクリスマスとお正月の過ごし方、最後にドイツ語について…」とドイツ語の学生たちの発表はこのように始まった。学生たちはあらかじめ用意してきた資料に従い、グループごとにまとまってプレゼンテーションを行った。

日本でも使われているドイツ語 ▶ Allergie…(アレルギー) ▶ Gaze…(ガーゼ) ▶ Kapsel…(カプセル) ▶ Karte…(カルテ) ▶ Schale…(シャーレ) ▶ Präparat…(プレパラート) ▶ Energie…(エネルギー) ▶ Natrium…(ナトリウム) ▶ Kartell…(カルテル) ▶ Konzern…(コンツェルン) ▶ Vektor…(ベクトル) ▶ Gummi…(グミ)＝ゴムの通 ▶ Joghurt…(ヨーグルト) ▶ Baumkuchen…(バウムクーヘン) ▶ Arbeit…(アルバイト) ▶ Ideologie…(イデオロギ) ▶ Kategorie…(カテゴリー) ▶ Metronom…(メトロノム) ▶ Gelände…(ゲレンデ) ▶ Rucksack…(リュックサック)	ドイツ出身の有名人  アンゲラ・ドロア・メルケル (Angela Dorothea Merkel) 政治家、連邦ドイツ連邦共和国第17代 大統領から、ドイツの女性首相に就任。首相として活躍する  ミハエル・シューマッハ (Michael Schumacher) ドイツ人男性のセーライバー・チャンピオン サン・セザン・優勝回数7回など多くの著名記録を刷新した  ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (Ludwig van Beethoven) クラシック音楽家。8歳から音楽家となる。1802年、 1808年に交響曲第五番「運命」、交響曲第九番（最終楽章）
第三問 ドイツには発泡酒がない。	クリスマスマーケット (Weihnachtsmarkt) 

学生作成の資料より

2-2. ロシア語の学生の発表

ロシアがどのような国であるか、面積、人口などの一般的な知識から始まり、大統領や有名な作家、ロシア料理の紹介、そして、ロシア語のミニレッスンという段取りで進められた。

☆ロシアのイメージは？ - 寒い場所？ - 国土の北辺は北極圏！ - とにかく広い！黒海近辺まで国土が - 食べ物 - ピロシキ・ボルシチ・ウォッカ - 文化の国 - トルストイ・ドストエフスキー - 膨大な絵画のコレクション そんなロシア語の文字は→	☆キリル文字で名前を書いてみよう
☆その他、ロシア語雑学！ - 今のロシアの大統領は... - メドベージェフ大統領 (Медведев) - Медведьという動物形容詞が語源。その意味は...熊！ 「イクラ」はロシア語で... - やっぱり「イクラ」！ - イクラー(икра)と言えば、小さな粒々したもの・魚卵という意味になる - ロシアと言えば、ウォッカ... - ウォッカ、の意味は「お水ちゃん」！ - Водка-水 водка-ウォッカ	☆喋れれば死なない!? ロシア語サバイバル！ - これは何ですか？ - Что это? - ここはどこですか？ - Где здесь? - ありがとう。 - Спасибо. - 家に帰りたいです。 - Я хочу домой. - 私はロシア語が話せません。 - Я не говорю по-русски.

学生作成の資料より

3. 交流授業を行ったクラスのカリキュラムについて

英語、ドイツ語、フランス語、 スペイン語、ロシア語、 中国語、韓国語	主選択		副選択	
	1年次	週 3 コマ	2年次	週 1 コマ
	2年次	週 2 コマ	3年次	週 1 コマ
	3年次	週 1 コマ		

交流授業は関西大学の総合情報学部の主選択クラス3年生で行った。本学部は、関西大学の他の学部、あるいはまた、他の日本の多くの大学ともかなり違った、特徴的な外国語の授業のカリキュラムをもつ。3年間で12単位の「主選択」の授業と4単位の「副選択」の授業が必須であり、英語以外にドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語、中国語、朝鮮語が用意されている。主選択は、これらの外国語から自由に選択でき、英語以外の外国語を主選択にした場合、副選択は英語が必修となる。すなわちここでは英語以外の外国語が英語と同じ位置に置かれていると考えてもよい。

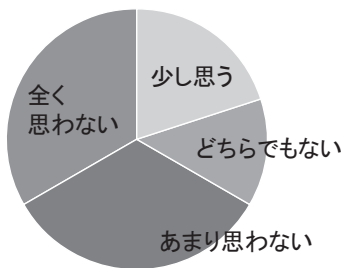
英語以外の外国語の主選択のクラスは、概ね各外国語1クラスであるため、学生は2年間あるいは3年間、同じ教師の授業を受けることになる場合が多い。この持ち上がり式のクラス編成は、3年間の継続的な授業計画を作成、実行しやすく、教師にとっては学生の習得状況に大きくかかわっている実感があり、やりがいのある教育環境である。しかしながら、学生と教師の間に齟齬がある場合は両者にとって苦痛が続くことになる両刃の剣ではある。

4. どのような学生がドイツ語、ロシア語を主選択として選ぶか

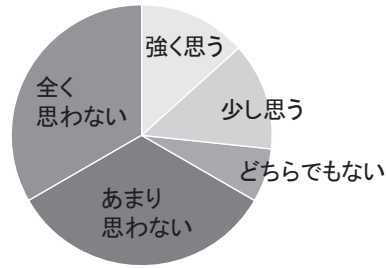
学生たちがどのように外国語を選択するかは、入学時に行われる外国語教育についてのオリエンテーションと、大学入学までの外国語の学習経験が大きく影響する。主選択に英語以外の外国語を選ぶのは、英語を避けるという消極的な理由と、新たな言語に対する興味の高さという積極的な理由、この二つの傾向で説明できる。

まず、既習の外国語である英語への態度については、図1、2のアンケート結果が示すように、比較的英語が苦手好きではない学生が多い。中、高での英語学習を通して語学学習に対する苦手意識の強い学生が、毎年少なからずいる。また図3のアンケート結果で分かるように、新しい言語を学ぶことへの期待感をもつ学生は多い。

英語は得意ですか



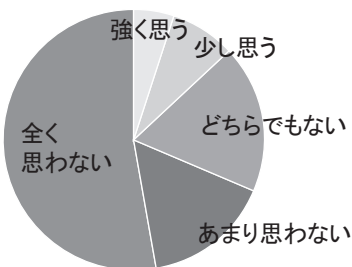
英語は好きですか



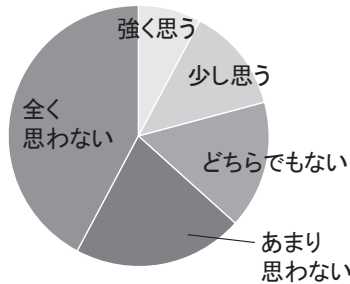
2010年度1年生（15名）対象アンケートより

図1. 英語に対する態度・ドイツ語主選択の学生の場合

英語は得意ですか



英語は好きですか



2010年度1年生（38名）対象アンケートより

図2. 英語に対する態度・ロシア語主選択の学生の場合

大学では英語以外の外国語を学ぶことができるという期待がありましたか？

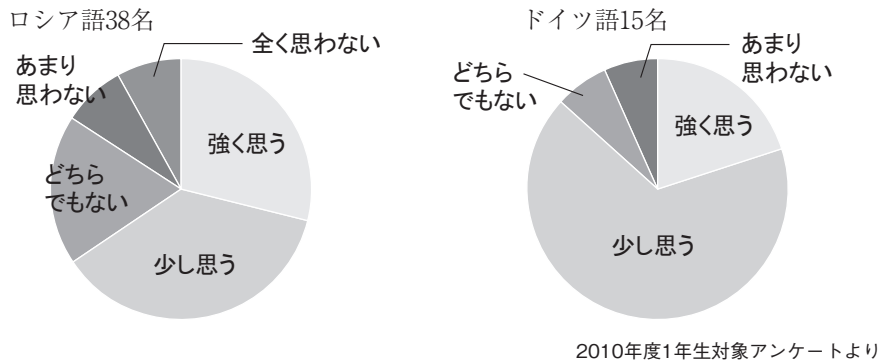


図3. 新しい言語を学ぶことへの期待感

5. 普段の授業形態

ドイツ語、ロシア語を主選択にした学生の中には英語が不得意だったという学生がいるが、英語も好きだったという学生もいる。語学がどちらかといえば好きな学生も少なからずいる。語学アレルギーのような学生もいれば、また英語の嫌いな学生の中には、英語は嫌いだったけど別の言語でリベンジを図りたいと思う学生もいる。実に様々な学生が思い思いに自らの絵を描きながら各クラスへ分かれていく。

この様々な思いを持った学生たちが、一つのクラスで1年を通して3人の教師から初級の一週りを学んでいく。3人の教師間は授業の進度を各時間の終わりにする報告で、状況がほぼ了解されている。ドイツ語は外国語の中では英語を学んだ者には入りやすい。特に文字は新たに覚えるものが、ä, ö, ü, ßの4文字のみだ。ロシア語はそうはいかない。キリル文字を覚えることから始めなくてはならない。それでも始まりはどの言語も新鮮で楽しい。

5-1. ドイツ語の授業

ドイツ語の授業は、オーソドックスな授業形態で進められる。3人の教師はあらかじめ相談をしたうえで、日本人の教師は語彙や文法習得中心の授業の他に映像を見せたり、ジャーマンポップスを聞かせたりする時間を取り、ネイティヴの教師は文法に即した応用会話を中心に授業を進める。

関西大学総合情報学部ドイツ語主選択の授業では、現在の1年生は『スツェーネン1』の教科書を使って、1年生の夏休みまでに自己紹介と家族紹介ができるように学習していき、秋学期の冬休み前までには付録の練習問題も含めて12課すべてを終える。ただしこの交流授業に参加した学生たちは、1年生当時に『自己表現のドイツ語1』、2年生で『自己表現のドイツ語2』を使い同じような目標のもとに学習してきた。3年生では毎年教科書を選択する。聞き取

りを中心にした教科書や書き取りを中心にした教科書を主にドイツの教科書から選んできた。しかしこの年に使用したのは、日本の出版社の『専門コースへのドイツ語文法』である。2年生までの文法を補い、ドイツの世界文化遺産のひとつを取り扱う教科書で、平易な文から始めやや難しい文を読むことを中心にしたものだ。この理由は学生がこの年比較的多く、2年生までの段階での習得状況から、聞き取りや書き取り中心よりも、文化事情を入れた読み物中心のほうがよいと判断したからである。

また教室の設備はAV機器、CD、カセットテープ用機器が整い、まずまずの環境の中で授業をすることができた（西村 2005）。

このような状況で学習して来るのだが、1年生の授業は、軽快に進んだのに、上位学年になるほど授業時間が少なくなり、学生にとって、記憶の蓄積が期待できず、モチベーションが大幅に後退するのが大きな課題となる。その背景には彼らは外国語学部で学んでいるわけではないことがある。したがって教師がいかなる働きかけをしようとも、ドイツ語の習得を目標としし難い現実がある。単位を取るためだけならその場限りの力を出すのだが、それを持続させていくだけの意欲を持たせることは大変難しくなる。それでもドイツ語を学習させることは諦めず、学生たちの意識にふさわしいトピックスや問題をドイツ語で常に用意しておくようにしている。また、検定試験を目指すことで、モチベーションの持続を図る。

5-2. ロシア語の授業

主選択としてロシア語を選択する学生の中には、語学学習に苦手意識を持つ者が少なくないことから、「語学学習をおもしろいと感じさせる」ということを学習初期の授業目標としている（北岡2008）。文字を覚えることから始めなければならないロシア語の授業では、1年生の最初のセメスターの目標を文字や音に慣れることとし、意図的に進度をかなり遅くしてイラストやことば遊び、歌などを活用した授業を進めている。2年目、3年目とある程度学習が進んだところで、積極的に学ぶ学生には、検定試験やロシア語コンクールへの参加を促して本格的に学ぶように方向づけている。

6. 交流授業の取り組みへ

こうして3年間授業が続くが、技能的にはドイツ語もロシア語も数名の熱心な学生が、ヨーロッパ共通参照枠のA2レベル、ドイツ語検定試験、ロシア語検定試験の3級レベルに到達する程度である。1年生週3回、2年生週2回程度の授業では、自主的な学習がない限りそれ以上の技能向上が難しいのが現実である。新しい言語を学ぶという期待をもって選択しているのだが、図4に見られるように学生たちにはその言語を「習得する」という目標意識はかなり低い。

しかしながら、技能的には習得したレベルがさほどではなくとも、「ロシア語を学んでよかつ

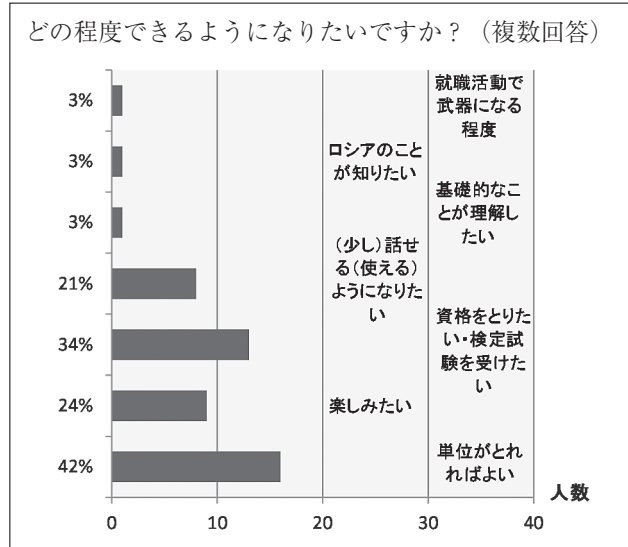


図4 ロシア語学習の目標（2010年1年生（38名）対象アンケートより）

た。今まで気づかなかったことに気づくようになった」などといったことばを残して卒業していく学生も少なくはない。外国語の学習を通してそれぞれに「何か」を学んでいるのであろう。その学んだ「何か」を学生たちが明示的に認識し、教師にとっては、この「何か」を、技能だけではなく新たな評価の対象として捉えることができないかと考えた。加えてロシア語を選択した場合、就職活動の際の面接で、多くの学生が「なぜロシア語を学習したのか」という質問を受けている。目前に迫る現実の問題として、学生たちはこれに対する答えを準備しておくなければならない。そこで、外国語を学ぶ意義を各人が考えることを目標として設定してみたのが交流授業である。

7. 交流授業の準備

ドイツ語の授業での交流授業へ向けての取り組みを紹介する。

- | | |
|--------|---|
| 12月3日 | 学生への周知：各自テーマを考える（次週への課題） |
| 12月10日 | 持ち寄ったテーマの絞込み
関心あるテーマごとへのグループ分け |
| 12月17日 | グループ内での具体的な方向付け
a. 行事（文化）、b. 社会・経済
c. クイズ、d. ドイツ語 |
| 1月6日 | パワーポイントの編集、完成
大まかな発表手順の打ち合わせ |

準備が始まったのは12月第1週目からで、第3週目までの授業時間の初めの10 - 15分程度を、意見交換や次回までに進めておくべき各自の課題の確認に使った。さらに全体的な段取りのために発表の前週に1時間を充てた。学生たちはこの作業を通して、3年間学習した言語に対して少なからぬ愛着と自負心を抱いていることを確認したようである。発表前の学生たちの感想を以下に紹介する。

質問：交流授業で伝えたいこと理解してもらいたいことはどんなことですか。

◎ドイツ語と言う一つの文化をドイツ語の授業を通して学んだという点。

◎名詞の性を覚えたりするのは大変であるが、英語よりもキッチリとしていてかつ英語で習ったことを無駄にはしないので勉強はしやすい。

◎交流授業では私達が楽しんでドイツ語を学んできたことを伝えたいと思っています。ドイツに行ったことがなくても、また上手くドイツ語が話せなくても、ドイツの色んなものを知ったことを認めてもらいたいです。また同じようにドイツについて興味を持ち色々を知ってもらいたいと思います。

8. この取り組みから得たもの

8-1. 学生の側から

以下に学生の交流授業に対する感想を紹介する。

ドイツ語の学生

- 3年間楽しくドイツ文化に触れて勉強してきたということを分かってほしいです。私がドイツ語を選んだのはドイツという国に興味があったからで就職のためなどとは考えたことはありませんでした。しかしドイツ語を学べる機会は大学でしかないことだと思うので、興味があって学ぶというのでもいいのではないかと思います。ドイツ語はある程度知っているところがあっても、逆にロシアのことは全くといっていいくらい知らなかった。ロシア語の先生が言ったように、面接で何故ドイツ語を選んだかを聞かれると答えにくい。そういう意味では、最初は何の意味があるかわからなかったけど、すごく有意義な時間でした。
- 楽しく拝聴させていただきました。異文化の知識は良い刺激になります。個人的には独語のクラスの「カタ」さはやはりこの文化を好む人の傾向なのかと感じました。

- 自分がやっているドイツ語以外の外国語の人が普段どんな勉強をしているのかが分かった気がした。歌で覚える感じとか似ているなどと思った。こういう授業の形は初めてだったので新鮮で楽しかった。
- ロシア語の読めなさになぜか感動してしまった。記号のような文字に驚いた。
- ドイツ語は新しいことにチャレンジしたいという気持ちから受けたので、交流を通して他の言語とも交流できて、そんな機会を得られてよかった。
- ロシアは北方領土の問題があるから日本とのかかわりが大きいけど、ドイツは何があるか知りたくなりました。
- 異文化交流を通じて、日本 アメリカ ドイツ ロシアなど自分の知っている各国における文化の違いや考えを少し深く学ぶことができました。
- ドイツ語と違ってロシア語は全く新しい文字で、読むことすらできなかった。しかし違う言語はおもしろいと思った。

ロシア語の学生

- 普段ふれあいのない他の語学と交流授業をすることで、自分の学んでいる言語との似ているところや違うところを知る良い機会になったのと、授業の雰囲気垣間見ることができ、語学を学ぶ姿勢の違いに気付くきっかけにもなったので、頻繁ではないにしろ、コラボ授業はあったら良いかなと思います！
- 人に伝えることでロシアを再確認したり、ドイツとロシアの共通点が見つかったりして、とても興味深く勉強になりました。僕の楽しいは知的好奇心の方が大きいです。確かにFUNNYなところもありましたが、感じた度合いとしてはInterestingの方が強かったと思います。

準備の段階では、何のためにこのような交流授業をやるのかはよく分からないが、とりあえず与えられた課題をこなす、という姿勢が感じられる。しかしながら、実際に、ドイツ語の学生とロシア語の学生が一つの教室に入り、互いのプレゼンテーションが始まると、多くの新たな気付きがあったようである。

ドイツ語の学生が、数字を綴りで書いて読み方を紹介すると、ロシア語の学生には、それが数字であることがすぐにわかる。また、書かれた文字もなんとなく読むことができる。しかしながら、ロシア語が書かれると、ドイツ語の学生は読むことができず、しかも、単語が発音されても、およそ聞いたことのない語ばかりである。ここで、学生たちは、ドイツ語とロシア語の日本での普及の違いを感じたようである。そこから、日露、日独の関係がどのようなものであるのかといった新たな興味も生じている。

また、「楽しくドイツ文化に触れて勉強してきた」「独語クラスの「カタ」さ」「歌で覚える感じ」「語学を学ぶ姿勢の違い」など、学生たちは、彼らがどのような語学の授業を経験してきた

かということも振り返り客観的な目で評価している。

「人に伝えることでロシアを再確認」とあるように、もちろん、自分たちの学んで来たものが何であったかも改めて振り返っている。

3年間ドイツ語やロシア語を勉強してきた学生たちは、自分たちの選択した言語を学習したことを多少なりとも誇りに思っていると上記の学生たちからの意見から読み取ることができると思う。しかも選択した外国語以外の外国語に対しても、新しく学ぶ用意ができることを示している。世の中に英語、日本語以外の言語があることを、この交流授業で身をもって体験できたといえる。外国語を学ぶことはあなたにどう作用しましたかという問いに対して、紋切型の「視野が広がりました。」以上のものを答として引き出してくることができたと考える。

8-2. 教師の側から

学生がドイツ語、ロシア語を互いに教え合う姿から、教師は、自身がどのような授業を展開してきたのかを知ることになった。

たとえば、ロシア語の学生がアルファベットを紹介するのに、А, Б, В, Г, Д…とアルファベットの順で文字の名称を紹介するのではなく、文字の音価を発音し、「自分の名前を書いてみましょう」と日本語の五十音順で「あいうえお」をキリル文字で書いたものを配布したり、単語を覚えるのにことば遊びを活用してきた授業の形をそのままに再現する。まさに、教師自身がどのような授業を行ってきたかを目の前で見せられる形となった。ドイツ語の場合も文を読んだり発音したりする場面でもとても自信なさそうなを見せられ、発音の課題を再認識した。

つまり今回の授業は、教師にとっては、3年間の授業の学生からのフィードバックの機能を果たし、授業の振り返りとして活用できる授業形態であることがわかった。

また、教師間で授業の工夫の交換ができた。長年教えていても、この方法が一番というのはなかなかない。いつも試行錯誤の繰り返しがある。そしてその長年の経験から一つだけ確信を持って言えることは、学生が生身の人間なら、教える教師も生身であるということだ。だからあるメソッドがとても良いといわれても、それが有効になるかは学生と教師との相互関係によるところも大きい。金科玉条としてメソッドにしがみついていると、肝心の学生に教えることは何であるのかを見失ってしまう。そのような場合に「他の人ならどうするだろう」、と情報を得るのもこういった授業形態でできる一つの方法であり、また情報交換の可能性の一つの場として考えられるかもしれない。

9. まとめ

外国語を学ぶということは、それを学んだ後に必ず有効に役立てることだけを前提にしてい

るわけではない。中学・高校で英語を入試の課目として学んできた多くの大学生は、外国語を学ぶことのおもしろさや、異文化の習慣や思考法の違いといった、本来、外国語を学ぶことから得られる気づきや学びをひとまず横に置いて、入試に必要な文法知識を詰め込み、読解力をつけ、和文英訳ができるようにと邁進してきたことであろう。そのような大学生たちが、大学で初めて学ぶ外国語の授業を通して、改めて外国語学習の面白さに気づき、外国語を学ぶこと自体を楽しみにすることも少なくないことを、我々は授業の中で日々見てきている。さらに、外国語を学ぶにはかなりの忍耐と思考力が必要であるが、強制されるからではなく自らチャレンジしていく面白さを知ることができるのも外国語教育の力といえる。

交流授業により、外国語学習を通してのこれらの「学び」を学生たち自らがそれぞれに確認する機会をつくることができた。「なぜ外国語を学ばねばならないのか」という質問に対する答えは一義的なものではない。学生たちがそれぞれに自分の答えを見出す力があるということも今回の試みから見えてきたものである。

参考文献

- 板山真由美・森田昌美（2004）『学習者中心の外国語教育をめざして 流通科学大学ドイツ語教授法ワークショップ論文集』三修社
- 大木充・西山教行（2011）『マルチ言語宣言 なぜ英語以外の外国語を学ぶのか』京都大学学術出版会
- 北岡千夏（2008）「モチベーションをはぐくむ ― 関西大学ロシア語教室の挑戦 ―」『関西大学 外国語教育フォーラム』第8号
- 白井恭弘（2008）『外国語学習の科学―第二言語習得とは何か』岩波書店
- 吉島茂・境一三（2003）『ドイツ語教授法』三修社
- 西村千恵子（2005）「一般教室での視聴覚教材を使ったドイツ語授業の可能性」『関西大学視聴覚教育』第28号
- 板山真由美・塩路ウルズラ・本河裕子・吉満たかこ（2007）『自己表現のためのドイツ語1』三修社
- 井出万秀・Claudia Hamann（2010）『専門コースへのドイツ語文法』朝日出版社
- 佐藤修子・下田恭子・Heike Papenthin・Gesa Oldehaver『スツェーネン1 場面で学ぶドイツ語』